那珂遺跡 71

── 第 142 次調査報告 ──

2015

福岡市教育委員会

序

福岡市は、原始より大陸文化流入の門戸として栄え、市内に多くの埋蔵文化財が残っています。このため、先人たちの足跡である埋蔵文化財の保護に努めるとともに、まちづくりの目標のひとつに「海と歴史を抱いた文化の都市」を掲げ、実現を目指しております。

本書は、共同住宅建設に伴う那珂遺跡群第142次発掘調査について報告するものです。この調査では弥生時代や古墳時代の集落跡を検出するとともに、遺物も多数出土しました。これらは地域の歴史の解明を進める上で重要な資料となるものです。

今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

平成27年3月25日

福岡市教育委員会

教育長　酒井龍彦

例　　言

1．本書は、福岡市教育委員会が福岡市博多区那珂１丁目地内の賃貸住宅建設予定地内において、2012年度（平成24年度）に実施した那珂遺跡群第142次発掘調査報告書である。
2．実測図に付した座標値は平面直角座標系第Ⅱ座標系（世界測地系）で、磁針方位（磁北）は6°40′西偏する。なお、個別遺構図に付した方位は全て真北を示す。
3．本書では遺構ごとに一連の遺構番号を付け、番号の前にＳＣ（竪穴住居）、ＳＤ（溝）、ＳＫ（土壙）などの遺構の性格を示す分類記号を付した。
4．本書に係る遺物・遺構の実測、写真撮影は瀧本正志が担当し、上方高弘と清金良太の協力を得た。
5．本書の執筆・編集は瀧本正志が担当し、萩尾朱美、田中ヤス子、中間千衣子の協力を得た。
6．本書の発掘調査に係る遺物・記録類のすべては、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵されている。

調査次数	調査番号	遺跡略号	調　査　地	面　積	調　査　期　間
142次	１２３２	ＮＡＫ－142	博多区那珂１丁目92番	４０８．７㎡	2013.1.23～2013.3.15

本 文 目 次

第 Ⅰ 章　はじめに …… 1
　1．発掘調査に至る経緯 …… 1
　2．調査の組織 …… 1

第 Ⅱ 章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 2
　1．遺跡の位置と歴史的環境 …… 2

第 Ⅲ 章　調 査 の 記 録 …… 5
　1．試掘調査の概要 …… 5
　2．発掘調査の概要 …… 6
　3．遺構 …… 8
　4．遺物 …… 13

第 Ⅳ 章　まとめ …… 20

挿 図 目 次

Fig. 1　調査地位置図（1/250,000）…… 1
Fig. 2　調査地周辺遺跡分布図（1/30,000）…… 3
Fig. 3　調査地周辺旧地形と調査状況図（1/11,800）…… 4
Fig. 4　調査地位置図（1/6,000）…… 5
Fig. 5　試掘調査坑位置図（1/600）…… 5
Fig. 6　試掘調査土層略図 …… 5
Fig. 7　SC18・19 調査風景 …… 6
Fig. 8　SE24調査風景 …… 6
Fig. 9　調査範囲図（1/800）…… 7
Fig.10　遺構配置図（1/200）…… 7
Fig.11　SC05 遺構実測図（1/50）…… 9
Fig.12　SE24 遺構実測図（1/40）…… 10
Fig.13　SK25 遺構実測図（1/40）…… 11
Fig.14　SC01 出土遺物実測図（1/3）…… 15
Fig.15　SC02 出土遺物実測図（1/3）…… 15
Fig.16　SC03 出土遺物実測図（1/3）…… 15
Fig.17　SC05 出土遺物実測図（1/3）…… 15
Fig.18　SC13 出土遺物実測図（1/3）…… 15
Fig.19　SC18 出土遺物実測図（1/3）…… 15
Fig.20　SC19 出土遺物実測図（1/3）…… 15
Fig.21　SC20 出土遺物実測図（1/3）…… 15
Fig.22　SD22 出土遺物実測図（1/3）…… 16
Fig.23　SD23 出土遺物実測図（1/3）…… 16
Fig.24　SE24 出土遺物実測図（1/3）…… 16
Fig.25　SK06 出土遺物実測図（1/3）…… 17
Fig.26　SK08 出土遺物実測図（1/3）…… 17
Fig.27　SK10 出土遺物実測図（1/3）…… 17
Fig.28　SK11 出土遺物実測図（1/3）…… 17
Fig.29　SP 出土遺物実測図（1/3）…… 18
Fig.30　出土石製品実測図（1/1・1/2）…… 19

図 版 目 次

ＰＬ．1　調査地周辺航空写真（1939 年撮影）
ＰＬ．2　調査地周辺航空写真（1948 年撮影）
ＰＬ．3　調査地周辺航空写真（1987 年撮影）
ＰＬ．4　調査地周辺航空写真（2007 年撮影）
ＰＬ．5　(1) 第 1 調査区全景（北西から）
ＰＬ．6　(1) 第 2 調査区全景（北西から）
　(2) 第 2 調査区全景（北東から）
ＰＬ．7　(1) SC01（北東から）と炉跡
　(2) SC02 北半部（北から）
　(3) SC02 東辺部（北から）
　(4) SC03（北から）
　(5) SC04（東から）
ＰＬ．8　(1) SC05（北から）
　(2) SC12（東から）
ＰＬ．9　(1) SC18～20（東から）
　(2) SC18（北から）
　(3) SC18 遺物出土状況（西から）
　(4) SC19（北西から）
　(5) SC20（北西から）
ＰＬ．10　(1) SB100（北から）
　(2) SD22（北東から）と土層（南東から）
ＰＬ．11　(1) SK25（南東から）と副葬品出土状況（北東から）
　(2) SE24（南東から）
ＰＬ．12　出土遺物(1)
ＰＬ．13　出土遺物(2)

第Ⅰ章　はじめに

1．発掘調査に至る経緯

福岡市経済観光文化局埋蔵文化財審査課は、平成 24 年 11 月 13 日付で福岡市博多区那珂 1 丁目 92 番における賃貸住宅建設工事に先立つ埋蔵文化財の有無についての照会（24－2－775）を受け、当該地の埋蔵文化財の有無についての書類審査を行った。その結果、申請地（1,005 ㎡）は埋蔵文化財包蔵地域の「那珂遺跡群」内に位置すると共に、当該地に東接する住宅地の発掘調査（那珂遺跡群第 90 次調査）でも弥生時代後期後半～古墳時代、律令期の竪穴住居を中心とした集落が検出されていることから試掘調査が必要との判断に至った。試掘調査（試掘番号 24－282）を平成 24 年 12 月 27 日、申請地に 3 本の試掘坑を設定して実施した結果、地表下 30 cm ～ 50 cm の橙色粘質土（鳥栖ローム層）上面において弥生時代～古代を中心とした集落跡が存在している資料を得た。

埋蔵文化財審査課は試掘結果を受け、計画される建設工事が実施された場合には遺跡に影響が及ぶものと判断し、事業者と文化財の取り扱いについて協議を行った。その結果、予定する工事事業対象面積のうち、当該工事により埋蔵文化財が影響を受けると判断される範囲については記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

その後、平成 25 年 1 月 21 日付けで地権者（個人）を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、埋蔵文化財調査課が同年 1 月 23 日から発掘調査を、平成 26 年度に資料整理および報告書の作成を行うこととなった。

2．調査の組織

調 査 主 体　福岡市教育委員会

	平成 24 年度（調査）	平成 26 年度（整理）
経済観光文化局文化財部長	藤 尾　浩	西 島 裕 二
埋蔵文化財調査課長	宮 井 善 朗	常 松 幹 雄
調査・整理担当（埋蔵文化財調査課）	瀧 本 正 志	瀧 本 正 志
庶務・経理担当（埋蔵文化財審査課）	古 賀 とも子	横 田　忍
事 前 審 査 担 当（埋蔵文化財審査課）	森 本 幹 彦	板 倉 有 大

Fig. 1　調査地位置図（1/250,000）　【国土地理院発行 20 万の 1 地勢図（福岡）を使用】

第Ⅱ章　遺跡の位置と歴史的環境

1．遺跡の位置と歴史的環境

那珂遺跡群のある福岡平野は、三方を三郡山系や背振山系からのびる小山塊に囲まれ、北は玄界灘に開いた博多湾に面した沖積平野である。この福岡平野の中央部を北流して博多湾に注ぐ那珂川と御笠川の間には、春日丘陵から断続的に長くのびる洪積台地が形成されている。春日丘陵と総称されるこの洪積台地は、花崗岩風化礫層を基盤とし、その上層部には阿蘇山の火砕流による八女粘土層と島栖ローム層が堆積している。この春日丘陵は、奴国王の王墓地とされる須玖岡本から井尻、五十川を経て那珂、比恵へと続いて博多湾の海岸砂丘に北面しており、それらの丘陵上には、後期旧石器時代から中世にかけての遺跡が連綿と複合的に展開している。殊に、弥生時代～古代にかけては濃密な分布状況を示している。

那珂遺跡群は、この春日丘陵の発端に位置し、比恵遺跡群と同じ丘陵上に立地しているが、便宜的に北半部を比恵遺跡群、南半部を那珂遺跡群と呼称している。第 142 次調査地点は、この那珂遺跡群の北東側に位置している。南側には御笠川の解析による細長い谷が東側から湾入し、その東辺に拡がる低地には那珂深ヲサ遺跡などの低湿地遺跡が立地している。

比恵・那珂遺跡群では、1938（昭和 13 ）年の区画整理時に発見された環濠集落の調査以来、これまでに約 300 地点で発掘調査が実施され、丘陵上において連綿と営まれた各時代の集落、墳墓地、道路の様相が次第に明らかになりつつある。ここで那珂遺跡群周辺を概観すると、丘陵の南東縁（ 37 次）で、ナイフ形石器や彫器、剥片などの旧石器時代の遺物が出土しているが、散逸的な分布にすぎない。

次の縄文時代も早期から晩期前半までは、石鏃や石匙、土器片などが断片的に出土しているが、遺構に伴った明確なものはなく、その有り様は前時代と大差はない。この傾向は、比恵遺跡群においても同様である。

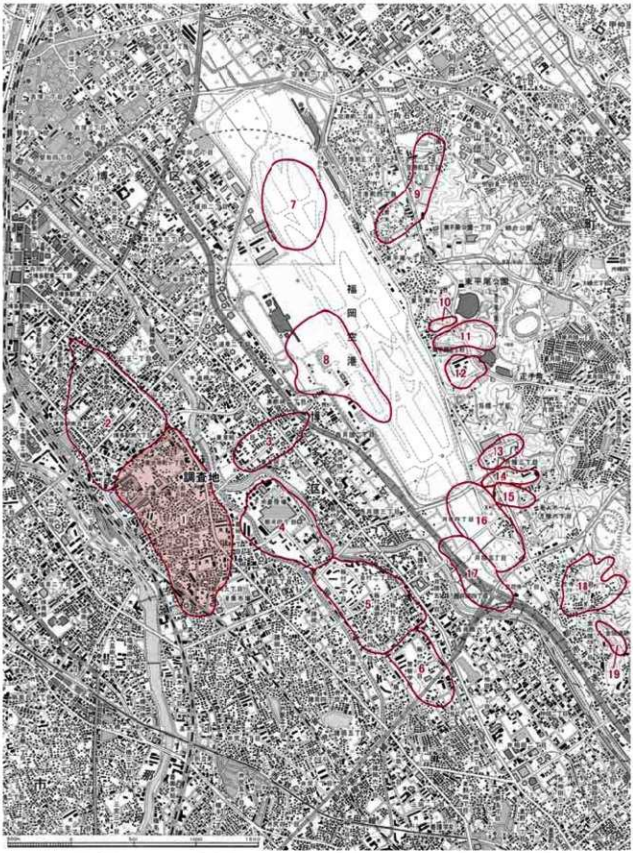
弥生時代になると、台地の縁辺部で竪穴住居や貯蔵穴群などの遺構が拡がり、斜面には土器や石器、木器を伴う包含層が形成される。集落域は尾根上へと次第に拡大していく。台地の南西縁（ 37 次）には、夜臼期から前期前半の二重環濠集落があり、北西縁のアサヒビール工場内や東縁部には貯蔵穴群が拡がっている。前期後半から中期になると集落域は、縁辺部から尾根上へと次第に拡大していく。比恵遺跡群の北側でも集落の拡大が見られる。

中期後半から後期には、比恵・那珂遺跡群とも台地上の全域が集落域化する感がある。井戸群や環濠のほか、銅剣や銅矛などの鋳型の中子なども出土する遺構も出現し、青銅器を生産する工人集団の工房群が台地の尾根上に現れる。また、集落域の周辺には墳丘墓をはじめとする甕棺墓群も造営され、遺跡の性格も拡大・多様化する。比恵遺跡群の中央部にある 6 次調査区では、細形銅剣を副葬する甕棺墓も出現する。遺物も、金属器や各種木製農耕具、漆製品などが出土している。

古墳時代になると、台地の中央部に福岡平野で最古期の前方後円墳である全長 58 m の那珂八幡古墳が造営され、その木棺内には三角縁神獣鏡が副葬されていた。これに続いて 6 世紀後半には、那珂八幡古墳の北 500 m の台地上に東光寺剣塚古墳と剣塚北古墳の 2 基の前方後円墳が造営される。このうち、東光寺剣塚古墳は、三重の周溝をもつ全長 140 m の筑前地域で最大級の前方後円墳である。この時期の集落は、比恵から那珂の台地上に広く展開する。また、企画性の高い柵列に囲まれた大型建物も台地上の各所に出現する。殊に、記紀に記された「那津官家」とされる大型建物群が、比恵遺跡群北西部の台地上で拡がっており、平野内の拠点的な集落として一翼を形成している。

古代には、台地の中央部に正方位の溝や大掘建物、井戸などがあり、何らかの官衙的な施設や寺院などの展開が推考される。更に、中世には、台地上に溝で区画した居館遺構が存在し、この時期まで平野内において中心的な役割を担っていたものと考えられる。

【この項、福岡市埋蔵文化財調査報告書第 672 集から転載】



1．那珂遺跡　2．比恵遺跡　3．東那珂遺跡　4．那珂君休遺跡　5．板付遺跡
6．高畑遺跡　7．上牟田遺跡　8．雀居遺跡　9．席田青木遺跡　10．久保園遺跡
11．席田遺跡　12．宝満尾遺跡　13．天神森遺跡　14．下月隈 B 遺跡　15．上月隈遺跡
16．下月隈 C 遺跡　17．立花寺 B 遺跡　18．立花寺遺跡　19．金隈遺跡

Fig. 2　調査地周辺遺跡分布図 (1/30,000)

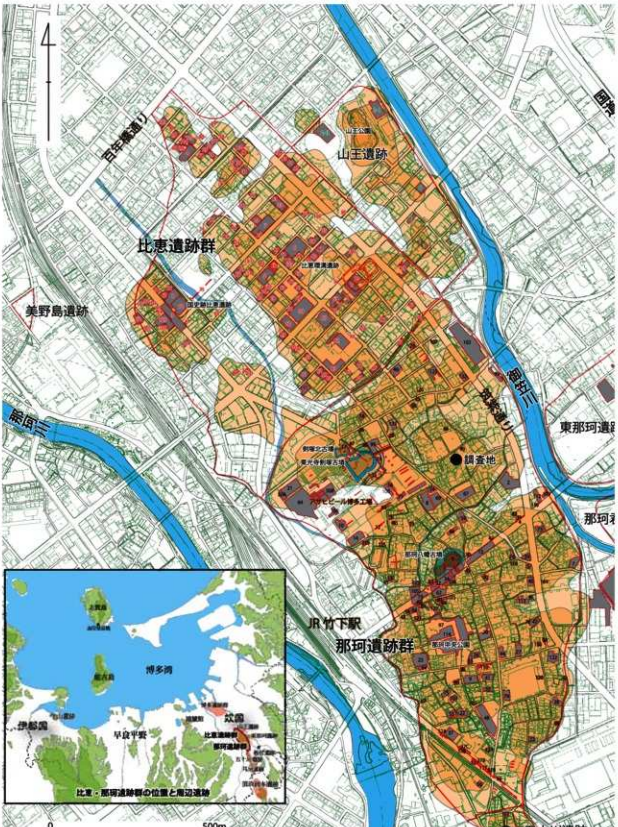


Fig. 3　調査地周辺旧地形と調査状況図（1/11,800）

【福岡市博物館 本田浩二郎氏作成図を一部加筆】

第Ⅲ章　調査の記録

1．試掘調査の概要

試掘調査（試掘番号24－282）は、平成24年12月27日、Fig.4・5に示すように申請地の北部・中央部・南部の3ヶ所に東西方向の試掘坑を設定して実施した。その結果、地表下30～50cmの橙色粘質土（鳥栖ローム層）上面において、黒褐色～暗褐色粘質土を覆土とする土壙・柱穴・竪穴住居を検出した。ローム層は試掘坑の中央でやや高く、東面に緩く傾斜するとする推定旧地形との差異は、後世の畑作などによる櫛平の影響を示していると考えられた。さらには少量ではあるものの弥生土器や土師器片を採取し、遺構が弥生時代後期～古墳時代を主体とするものであるとした。

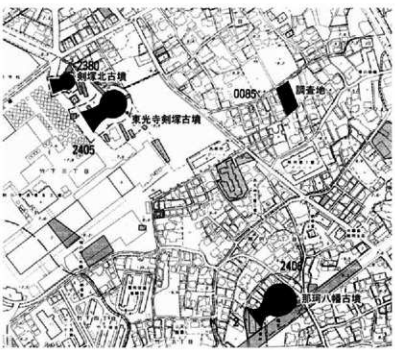
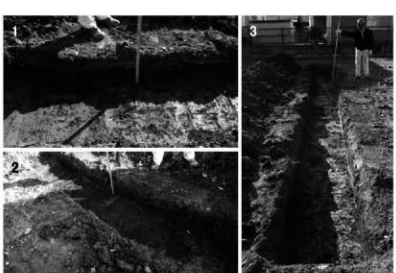


Fig.4　調査地位置図（1/8,000）

Fig.5　試掘調査坑位置図（1/600）



試掘調査状況（1：Tr.1　2：Tr.2　3：Tr.3）

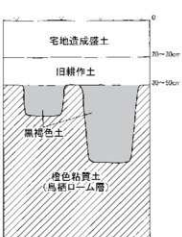


Fig.6　試掘調査土層略図

2．発掘調査の概要

調査範囲は、試掘調査結果や当該地に隣接する那珂遺跡第 90 次調査の状況から、遺構が工事予定範囲全域に広がっていることが強く予想され、工事によって影響を受けると考えられる 3 棟の建物基礎部分と各建物間部分を対象とした。調査は、排土置場の関係などから、調査区を南北二つに分割し、南側を第 1 調査区、北側を第 2 調査区として実施した。

調査地は、北へ延びる春日丘陵の尾根上および東側の斜面に位置し、標高 8.2 m を測る宅地である。調査地の北側には旧地形を色濃く残す畑が広がっており、調査地と標高や形状を比較すると、調査地全域で地下げが行われ、特に西側の丘陵背部分で強く行われたことを物語っている。このことは、試掘調査などで、基盤層の鳥栖ローム層が表土直下で出現し、暗茶褐色～黒褐色を呈する遺物包含層の残存が極めて少ないことからも伺える。

遺構検出は、重機を用いて表土を除去した後、台地を形成する地表下 20 ～ 50 cm の橙色粘質土層（鳥栖ローム層）上面で行った。遺構面は平坦で、地形を反映してか僅かに東方へ傾斜する。

検出した遺構は、弥生時代中期の円形竪穴住居 1 棟、古墳時代後期の方形竪穴住居 8 棟、土壙墓 1 基、井戸 1 基、土壙、溝状遺構、柱穴・小穴多数などである。弥生時代の竪穴住居は経 6 m を測り、中央部に炉を設けている。古墳時代後期の竪穴住居では、二本柱で屋根組みを支える例を確認した。他の住居跡は、削平が激しくて規模や構造は不明。柱穴および小穴の多数は、弥生時代中期、古墳時代～古代に比定される竪穴住居や掘立柱建物を構成していたものと考えられる。土壙墓は隅丸長方形の平面形を呈し、副葬品を伴っていた。

遺物は弥生土器、土師器、須恵器、石製玉類などがコンテナで 10 箱が出土した。遺構は検出に至らなかったものの甕棺と推定される破片が出土しており、注目された。総じて、弥生時代中期と古墳時代後期のものが大半を占めた。

発掘調査は 2013 年 1 月 23 日から開始し、同年 3 月 15 日に終了。調査面積は 408.7 ㎡を測る。

資料整理・報告書作成は 2014 年度に実施し、2015 年 3 月 25 日に調査報告書を刊行するに至った。

Fig. 7　SC18・19 調査風景

Fig. 8　SE24 調査風景

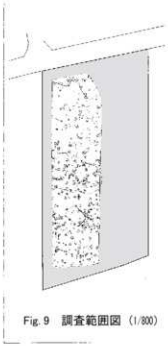


Fig. 9　調査範囲図（1/800）

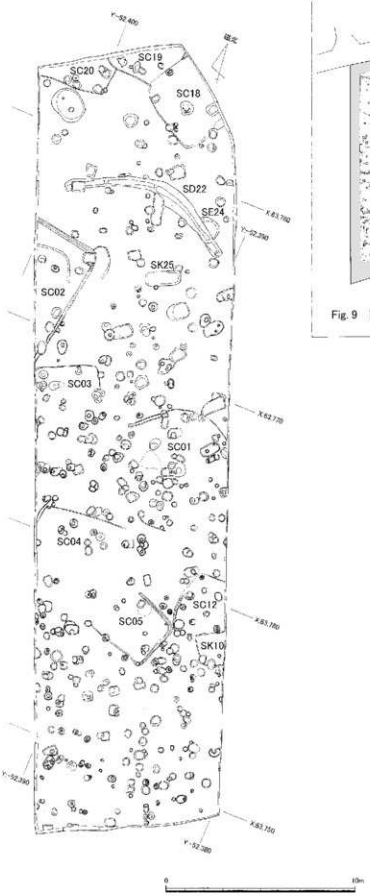


Fig. 10　遺構配置図（1/200）

3．遺 構

(1)掘立柱建物（ＳＢ）

ＳＢ１００（Fig.9　PL.5 ,10）

調査区中央部に位置する。隅丸方形の柱掘方は、方 0.6 m ～ 0.9 m 、深さ 0.3 m ～ 0.4 m を測る。建物規模及び時期は不明。柵・塀の可能性も考えられる。

(2)竪穴住居（ＳＣ）

ＳＣ０１（Fig.9　PL.5 ,7 ）

調査区中央部に位置する円形の竪穴住居跡である。大規模な削平により竪穴壁と壁溝を僅かに残し、竪穴の規模は径 6.3 m が推定復元される。床面は平坦で、中央部は短辺 0.6 m ×長辺 1.2 m を測る隅丸方形状に比熱し、赤褐色を呈している。壁溝は壁裾に沿って設けられ、幅 15 cm 程度である。柱穴は四本柱を想定しているが、多角形状に配している可能性がある。住居跡からは、弥生時代中期の甕、丹塗磨研壺、鉄製品などが出土している。

ＳＣ０２（Fig.9　PL.5 ,6 ,7 ）

調査区北半部西辺に位置する方形の竪穴住居跡で、北辺と東辺の壁および壁溝を検出した。遺構の大半は調査区外に拡がるが、短辺 4 m 以上×長辺 6.5 m 以上の建物規模が推定される。住居の北辺には地山を床面より 10 cm ほど高く削り出した平坦面が認められ、いわゆるベッド状遺構と呼称されるものである。壁溝は幅 20 cm・深さ 8 cm を測り、壁裾に沿って設けている。床面の柱穴から、建物の屋根支えは柱が四本立ての構造で、径 15 ～ 20 cm ほどの丸太を用いていたと推定される。住居跡からは、弥生土器甕・二重口縁壺・丹塗磨研甕、須恵器甕・坏身・高坏、土師器器台、砥石、玉石が出土している。

ＳＣ０３（Fig.9　PL.5 ,7 ）

調査区中央部西辺、ＳＣ０２の南に位置する竪穴住居跡である。削平が著しく、壁高は 5 cm 程を測る。竪穴の南半部を欠失して建物規模は不明であるが、北辺 3.4 m 、東辺 1.2 m ほどが残存する。床面の西北隅で壁溝が僅かに確認される。建物構造は不明である。住居跡からは、弥生土器甕、須恵器坏身・高杯・甕、土師器甕・丸底壺、黒曜石剥片が出土している。

ＳＣ０４（Fig.9　PL.5 ,7 ）

調査区中央、ＳＣ０１の南西に位置する方形の竪穴住居跡である。削平が著しく、残存する壁高は 5 cm 程を測る。竪穴の大半が欠失し、竪穴住居の規模および構造は不明であるが、建物の屋根支えは柱が四本立ての構造で、径 15 ～ 20 cm ほどの丸太を用いていたと推定される。竪穴の北西角部が残存し、北辺長は 4.1 m ほどを測る。住居跡からは、弥生土器甕、須恵器坏身（６世紀前半）が出土している。

ＳＣ０５（Fig.9 ,10　PL.5 ,8 ）

調査区南半部中央、ＳＣ０１の南に位置する方形の竪穴住居跡で、竪穴の西辺部を欠失するものの、長辺（東西）3.95 m・短辺（南北）3 m の建物規模が復元される。壁高は 2 ～ 5 cm 程を測る。建物の屋根支えは二本柱立ての構造で、径 15 ～ 20 cm ほどの丸太を用いていたと判断される。壁溝は幅 10 ～ 20cm・深さ 5 cm を測り、残存する三方の壁裾に沿って設けられている。住居跡からは、弥生土器甕、須恵器甕・坏蓋、土師器甕・甑が出土している。

ＳＣ１２（Fig.9　PL.5 ,8 ）

調査区南半部東辺、ＳＣ０５の東に位置する方形の竪穴住居跡で、遺構の大半が調査区外に拡がり、建物規模は不明である。竪穴の南西部と北辺の一部を確認したが、削平が著しく、残存する壁高は 5 cm を測る。竪穴の西辺壁裾には幅 10 cm ほどの壁溝が認められる。建物の住居跡からは、弥生土器甕、須恵器坏蓋、土師器甕が出土している。

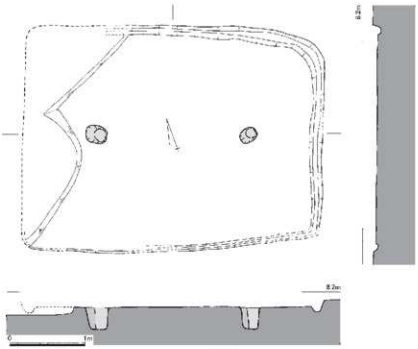


Fig.11　ＳＣ０５遺構実測図（1/50）

ＳＣ１３（Fig.9　PL.5）

調査区南半部西辺、ＳＣ０４の南に位置する方形の竪穴住居跡で、竪穴の南東隅部を確認した。遺構の大半が調査区外に拡がり、建物規模は不明である。壁高は数 cm を測り、削平の度合いを知る。住居跡からは、須恵器甕・坏身・坏蓋、土師器甕が出土している。

ＳＣ１８（Fig.9　PL.6,9）

調査区北辺に位置する方形の竪穴住居跡で、遺構の一部がＳＣ１９と重複して後出する。遺構の大半は調査区外に拡がり、建物規模は不明であるが、短辺 4.1 m 、長辺 3 m 以上を測る。平坦な床面に残る柱穴から、建物の屋根支えは柱が二本立ての構造で、径 20 cm ほどの丸太を用いていたと判断される。壁溝は幅 20 cm・深さ 10 cm を測り、少なくとも北側の壁裾に沿っては設けられている。住居跡からは、弥生土器甕・高杯・丹塗壺、須恵器甕・坏身が出土している。

ＳＣ１９（Fig.9　PL.6,9）

調査区北辺に位置する方形の竪穴住居跡で、遺構の一部がＳＣ１８とＳＣ２０と重複しつつ調査区外に拡がり、建物規模は東西辺 3 m ×南北辺 2.6 m 以上である。建物の屋根支えは四本柱の構造である可能性が高い。壁溝は幅 15 cm・深さ 5 cm を測り、少なくとも北側の壁裾に沿っては設けられている。ＳＣ18 より先出し、ＳＣ20 より後出する。住居跡からは、弥生土器甕・丹塗高杯、須恵器蓋、土師器甕、黒曜石剥片が出土している。

ＳＣ２０（Fig.9　PL.6,9）

調査区北東隅に位置する方形の竪穴住居跡で、遺構の一部がＳＣ１９と重複して後出する。遺構は調査区外に拡がり全容は不明であるが、建物規模は東西辺 3.5 m ×南北辺 2.3 m 以上と推定される。住居跡からは、弥生土器甕・丹塗壺、須恵器蓋、土師器甕が出土している。

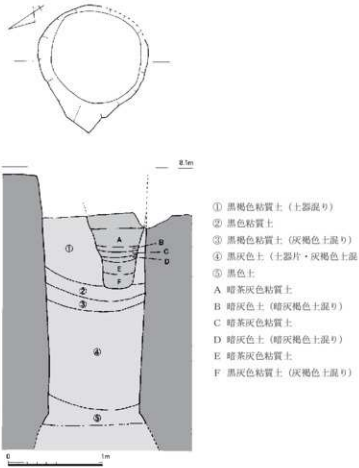


Fig. 12　ＳＥ２４遺構実測図（1/40）

(3)溝（ＳＤ）

ＳＤ２２（Fig. 9　PL. 5 ,10）

調査区北半部中央に位置し、平面形は中央部が広く、両端ほど狭くなる三日月状を呈する溝で、全長9.75 m を測る。中央部では最大幅 1 m・深さ 1 m を呈し、両端では幅 0.4 m・深さ 0.2 ～ 0.4 m を測る。底面は狭い平坦面を成し、断面形はＵ字形を呈する。弥生土器甕・丹塗壷、須恵器甕・坏身・坏蓋・甑、土師器甕、黒曜石製石鏃が出土している。

(4)井戸（ＳＥ）

ＳＥ２４（Fig. 9 ,12　PL. 5 ,10, 11）

調査区北半部東辺に位置する井戸で、深さ 2.7 m まで確認した。掘方は円形の平面形を呈し、下部では僅かに狭くなるものの壁は垂直に下がり、上縁から 2.5 m 以下では広がりを見せる。壁面の崩落によるものと考えられる。井戸枠などの構造物は確認されなかった。 SD２２に遺構の一部を壊されている。覆土の黒色土からは、弥生土器甕・高杯・丹塗甕・丹塗壷・丹塗高杯、須恵器坏身、土師器甕、黒曜石石核が出土している。

(5)土壙・土壙墓（ＳＫ）

ＳＫ０６（Fig. 9　PL. 5）

調査区北半部中央に位置する隅丸長方形の土壙である。長辺 1.1 m・短辺 0.8 m 、残存する深さは 0.7 m を測る。弥生土器甕、須恵器甕・坏蓋、土師器甕・甑が出土している。

ＳＫ０８（Fig.9　PL.5）

調査区中央部西辺に位置する隅丸長方形の土壙で、西辺部を欠失する。長辺推定 1.2 m・短辺 0.7 m を測り、残存する深さは 0.7 m である。弥生土器甕、土師器甕が出土している。

ＳＫ１０（Fig.9　PL.5）

調査区南半部東辺に位置する隅丸長方形の土壙で、遺構の大半は調査区外に拡がる。規模は不明であるが、短辺 1.7 m ・長辺 1.6 m 以上を測る。残存する深さは 0.1 m である。小型の竪穴住居の可能性も考えられる。弥生土器甕・壺・丹塗高杯、須恵器坏蓋が出土している。

ＳＫ１１（Fig.9　PL.5）

調査区中央部西辺に位置する楕円形状の土壙である。長軸 1.2 m・短軸 0.2 m を測り、残存する深さは 0.7 m である。弥生土器甕・小型壺が出土している。

ＳＫ１５（Fig.9　PL.5）

調査区中央部に位置する不整形な土壙である。長辺 1.8 m・短辺 1 m を測り、残存する深さは 0.8 m である。弥生土器甕・高杯・丹塗土器が出土している。

ＳＫ１６（Fig.9　PL.5）

調査区南半部中央に位置する隅丸方形の土壙である。方 0.8 m を測り、深さは 0.4 m である。土師器甕、粗製土玉が出土している。SC05 に伴うものと考えられる。

ＳＫ１７（Fig.9　PL.5）

調査区中央部西辺に位置する土壙で、遺構の大半が調査区外に広がる。方形の平面形を想定させ、南東隅部の角を確認した。竪穴住居の可能性が高い。辺 1 m を測り、残存する深さは 0.1 m である。須恵器、土師器甕が出土している。

ＳＫ２１（Fig.9　PL.6）

調査区北西隅に位置する楕円形の土壙である。長径 1.8 m ・短径 1.4 m を測り、残存する深さは 0.3 m である。土師器甕が出土している。

ＳＫ２５（Fig.9 ,11　PL.5 ,6 ,11）

調査区北半部中央に位置する隅丸長方形の土壙墓で、西端部を欠失する。墓壙は、底面が平坦で、壁は直線的に外反しながら立ち上がる。墓壙の規模は全長 2 m・幅 0.8 m が復元され、残存する深さは 25 cm である。木棺などの痕跡は認められなかった。墓底の中央部から管玉 2 点が接するように出土した。

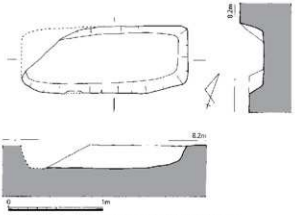


Fig.13　ＳＫ２５遺構実測図（1/40）

(6)柱穴・小穴（ＳＰ）

ＳＰ０１（Fig.9　PL.5）

調査区中央部に位置し、隅丸長方形の掘方を呈する。長辺1m・短辺0.6mを測り、残存する深さは0.4mである。掘立柱建物の柱穴と考えられる。石錘、土師器甕が出土している。

ＳＰ０３（Fig.9　PL.5）

調査区中央部に位置し、隅丸長方形の掘方を呈する。長辺35cm・短辺30cmを測り、残存する深さは20cmである。弥生土器、土師器甕、滑石製臼玉が出土している。

ＳＰ０６（Fig.9　PL.5）

調査区中央部東辺に位置する隅丸長方形の柱穴である。長辺0.9m・短辺0.7mを測り、残存する深さは0.4mである。弥生土器甕、土師器甕、滑石製臼玉が出土している。

ＳＰ３６（Fig.9　PL.5）

調査区中央部西辺に位置する隅丸長方形の柱穴である。長辺0.7m・短辺0.5mを測り、残存する深さは0.6mである。弥生土器、須恵器甕・坏身・坏蓋、土師器甕が出土している。

ＳＰ５２（Fig.9　PL.5）

調査区中央部に位置する楕円形状の柱穴である。長径0.5m・短径0.4mを測り、残存する深さは0.2mである。土師器、ガラス小玉が出土している。

ＳＰ５８（Fig.9　PL.5）

調査区南半部中央に位置する楕円形状の柱穴である。長径0.5m・短径0.4mを測り、残存する深さは0.6mである。土師器甕、高杯が出土している。

ＳＰ１４３（Fig.9　PL.5）

調査区南半部東辺に位置する円形の小穴である。径0.5mを測り、残存する深さは0.2mである。須恵器甕・坏身、土師器壷が出土している。

ＳＰ１５１（Fig.9　PL.5）

調査区中央部西辺に位置する楕円形状の柱穴である。長径0.6m・短径0.4mを測り、残存する深さは0.3mである。古式土師器甕がほぼ完形で出土している。

ＳＰ１６２（Fig.9　PL.5）

調査区南半部西辺に位置する隅丸方形の小穴である。方0.5mを測り、残存する深さは0.3mである。須恵器高杯・土師器甕が出土している。

ＳＰ２０６（Fig.9　PL.5）

調査区北辺に位置する楕円形状の小穴である。径0.7mを測り、残存する深さは0.2mである。弥生土器甕・高杯、須恵器甕・坏身・坏蓋が出土している。

ＳＰ２２６（Fig.9　PL.5）

調査区北辺に位置する隅丸長方形の小穴である。長辺0.5m・短辺0.4mを測り、残存する深さは0.5mである。弥生土器甕が出土している。

ＳＰ２２７（Fig.9　PL.5）

調査区北辺に位置する隅丸方形の小穴である。方0.7mを測り、残存する深さは0.7mである。弥生土器甕が出土している。

4．遺 物

(1)竪穴住居（ＳＣ）

ＳＣ０１（Fig.14）　弥生時代中期の甕、丹塗磨研壺、鉄製品などが出土している。**10** は弥生時代中期の甕の底部である。底部は平坦な底面から直線的に外反しながら立ち上がる。

ＳＣ０２（Fig.15　PL.12）　弥生時代前期～中期前半の甕、大型甕、二重口縁壺、丹塗磨研甕、須恵器坏身・坏蓋、土師器小型器台、砥石、玉石が出土している。**13・15** は口径 11 cm・器高 4 cm が復元される須恵器の坏身である。**14** は口径 12 cm・器高 4 cm が復元される須恵器の坏蓋である。**12** は小型器台の脚部で、坏部を欠く。脚部は円錐形に成形した後に刷毛目整形し、端部は丸味を持つ。中位の 2 ヶ所に径 1 cm の穿孔。

ＳＣ０３（Fig.16）　弥生土器甕、須恵器坏身・高杯・甕、土師器甕・丸底壺、黒曜石剥片が出土している。**16・17**は口縁部が 1.5 cm の立ち上がりを持つ須恵器坏身で、口径は 12～13 cm が復元される。

ＳＣ０５（Fig.17　PL.12）　弥生土器甕・壺、須恵器甕・坏蓋、土師器甕・甑が出土している。**18** は広口壺で、口縁は直立気味に立ち上がり、端部を丸く仕上げている。

ＳＣ１３（Fig.18）　須恵器甕・坏身・坏蓋、土師器甕が出土している。**32** の須恵器坏蓋は、天井部と体部との境が不明瞭で、口縁端部も丸く仕上げている。口径 11 cm・器高 4 cm が復元される。

ＳＣ１８（Fig.19　PL.12）　弥生土器甕・高杯・丹塗壺、須恵器甕・坏身が出土している。**35** は弥生時代中期の甕で、口縁は「く」の字状に外反し、端部は面を成すものの丸く仕上げている。口縁部と胴部との境には断面形が三角形の粘土紐を貼り付けている。外面は刷毛目調整。**34** は口径 11 cm・器高 4 cm が復元される須恵器の坏身である。口縁部は内傾して立ち上がり、1.2 cm を測る。底部外面には一条の直線のヘラ記号をもつ。**36** は須恵器の甕で、口縁端部は稜を成して断面形が三角形状。

ＳＣ１９（Fig.20　PL.12）　弥生土器甕・丹塗高杯、須恵器坏身・坏蓋、土師器甕、黒曜石剥片が出土している。**38** の須恵器坏身は口径 11 cm・器高 4 cm 、口縁部は内傾しながら短く立ち上がり 0.9 cm を測る。底部外面にはヘラ記号をもつ。

ＳＣ２０（Fig.21　PL.12）　弥生土器甕・丹塗壺、須恵器蓋、土師器甕が出土している。**40** は弥生土器の壺で、口縁は二重口縁である。口縁端部は平坦面を呈する。

(2)溝（ＳＤ）

ＳＤ２２（Fig.22　PL.12）　弥生土器甕・丹塗壺、須恵器甕・坏身・坏蓋・高杯・甑、土師器甕・器台、黒曜石製石鏃が出土している。**44** は須恵器坏蓋で、天井部は丸みを呈し、口縁部の境界は段差を設けて明瞭である。口径 13 cm 、器高 4.5 cm が復元される。**45** は天井部が扁平で、口縁部が広がる。口径 16～17 cm 、器高 4 cm が復元される。**46** は口径 11 cm 、器高 4 cm が復元される須恵器坏身で、口縁部は内傾しながら短く立ち上がり 0.9 cm を測る。**43** は須恵器高杯で、坏部と脚端部を欠く。脚部中位に 2 条の沈線を廻らして上下に区分し、それぞれに透かしをイメージさせる切込みを施している。**41** は土師器小型器台の坏部である。口縁部は短く直立する。**42** は甕の取手で、壁厚 8 mmの胴部に貼り付けている。**10001** は黒曜石製の石鏃で、両面中央に大型剥離面を残し、縁や刃部を細かいリタッチ仕上げ。

ＳＤ２３（Fig.23　PL.12）　弥生土器甕、土師器壺が出土している。**47** は小型丸底壺で、底部を欠く。口径 10 cm が復元される。胎土は精製されている。

(3)井戸（ＳＥ）

ＳＥ２４（Fig.24,30　PL.12,13）　弥生土器甕・高杯・丹塗甕・丹塗壺・丹塗高杯・袋状口縁壺、須恵器坏身、土師器甕、石皿、黒曜石核が出土している。一部に上部遺構のＳＤ２２の遺物が混入している。**52** は中層から出土の丹塗磨研高杯で坏部と脚端部を欠く。脚部外面は幅 5 mm ほどで丁寧に研磨している。坏部内面も同様な調整を施している。**51** は袋状口縁壺で、口縁端部は丸く仕上げ、外面だけ丹塗りを施している。**49・50** は口縁がくの字状に外反し、端部は丸みを持つ。口縁部下の外面には縦方向の刷毛目痕を残す。**48** は須恵器の甕で、外面に櫛による波状文が施されている。調査時の混入か。**10012** は砂岩系の石皿で、半分ほどを欠失する。広口の両面ともに中央部に向かって深くなる凹みを呈する。器面には多数の小さな剥がれ痕跡があり、叩打具が石製であることを示す。

(4)土壙・土壙墓（ＳＫ）

ＳＫ０６（Fig.25）　弥生土器甕・高杯、須恵器甕・坏蓋、土師器甕・甑が出土している。**20** は丹塗磨研の高杯の坏部である。口縁端部は角張る。胎土は精製。**19** は「く」の字状に外反する甕の口縁部で、端部近くほど厚くなる。**21**は丹塗磨研の壷で、胴部に断面形が M 字状の突帯が廻る。胎土は精製。**22** は甕の底部で、外面は黒色を呈する。

ＳＫ０８（Fig.26）　弥生土器甕・壷、土師器甕が出土している。**23** は丹塗の壷か。**24** は丹塗磨研の小型壷で、蓋付の可能性がある。胎土は精製。**25・26** は甕の底部で、外面は刷毛目調整している。

ＳＫ１０（Fig.27）　弥生土器甕・壷・丹塗高杯、須恵器坏蓋が出土している。**27** は丹塗磨研高杯で、脚部は「く」の字状に外側へ折れ曲がり、器面を縦方向に 5 mm の幅で丁寧に研磨仕上げ。胎土は精製。**28** は弥生土器の甕で、平坦な底面から大きく外反しながら立ち上がる。器面調整は粗い刷毛目。

ＳＫ１１（Fig.28）　弥生土器甕・小型壷が出土している。**30** は口径 15 cm が復元される小型壷である。口縁部は「く」の字状に折れ曲がり、径 6 mm の穿孔がある。蓋とセットになっていたものであろう。胎土には 1～4 mm ほどの石粒を多く含む特徴がある。**29** と **31** は甕で、ともに器面は刷毛目調整。

ＳＫ１６（PL.12）　土師器甕、粗製土玉が出土している。

ＳＫ２５（Fig.30　PL.13）　管玉が出土している。**10002** は棗状に研磨して整形し、径 2.5 mm を穿孔している。**10003** は円柱形に研磨整形。穿孔具は、貫通する径 2.5 ～ 3 mm の穴の形状から先尖形であることを示す。

(5)小穴（ＳＰ）

ＳＰ０１（Fig.30　PL.13）　土師器甕、石錘が出土している。**10011** は緑泥変岩製の小型石錘である。ラグビーボール状に研磨して整形した後、外周する溝を削りにより施している。

ＳＰ０３（Fig.30　PL.13）　須恵器甕・坏蓋、土師器甕、臼玉が出土している。**10004**～**10007** は滑石製の臼玉である。径 6 mm 、厚さ 0.5 ～ 3 mm を測る。穿孔の径はいずれも 2 mm。

ＳＰ０６（Fig.30　PL.13）　弥生土器甕、土師器甕、臼玉が出土している。**10008** は滑石製の臼玉である。径 6 mm 、厚さ 1 mm を測る。穿孔の径は 1.5 mm を測る。

ＳＰ３６（Fig.29　PL.13）　弥生土器、須恵器甕・坏身・坏蓋、土師器甕が出土している。**3** の須恵器坏身は、底浅でやや扁平な器形を呈する。受部の口縁は 9 mm と短く、強く内傾する特色を持つ。口径 11 cm 、器高 4 cm を測る。底部外面には直線を三本並べたヘラ記号を持つ。

ＳＰ５２（Fig.30　PL.13）　土師器、ガラス玉が出土している。**10009** は径 4 mm 、厚さ 2.5 mm 、孔径 1 mm を測るガラス製の小玉である。藍色を呈し、不純物は認められない。

ＳＰ５８（Fig.29　PL.13）　土師器甕・高杯が出土している。

ＳＰ１４３（Fig.29　PL.13）　須恵器甕・坏身、土師器壷が出土している。**4** の須恵器坏身は、底浅でやや扁平な器形を想定させる。受部の口縁は 14 mm で、内傾しながら立ち上がるものの端部近くで直立気味の特色を持つ。口径 12 cm 、器高 5 cm が復元される。

ＳＰ１５１（Fig.29　PL.13）　土師器甕が出土している。**1** は古式土師器の甕で、胴部は球形を呈する。口縁径 15.7 ～ 16.4 cm、器高 17.5 cm、胴部最大径 17.4 cm を測る。器壁の厚さは 2～3 mm。

ＳＰ１６２（Fig.29　PL.13）　須恵器高杯、土師器甕が出土している。**5** は短脚の高杯で坏部と脚端部を欠く。坏部の底部内面にはあて具の痕跡が残る。

ＳＰ２０６（Fig.29　PL.13）　弥生土器甕・高杯、須恵器甕・坏身・坏蓋が出土している。**6** の須恵器坏身は、底浅でやや扁平な器形を想定させる。受部の口縁は 15 mm で、内傾しながら直線的に立ち上がる。口径 12 cm 、器高 5 cm が復元される。焼成は軟質で、白色を呈する。

(6)その他

遺構検出（Fig.30　PL.13）　管玉が出土している。**10010** は円柱形に研磨整形している。穿孔具は、貫通する径 2.5 ～ 3 mm の穴の形状から先尖形であることを示す。

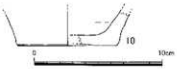


Fig. 14　ＳＣ０１出土遺物実測図（1/3）

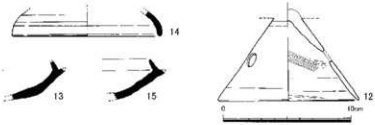


Fig. 15　ＳＣ０２出土遺物実測図（1/3）

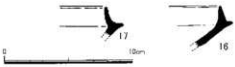


Fig. 16　ＳＣ０３出土遺物実測図（1/3）

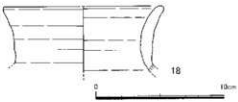


Fig. 17　ＳＣ０５出土遺物実測図（1/3）

Fig. 18　ＳＣ１３出土遺物実測図（1/3）

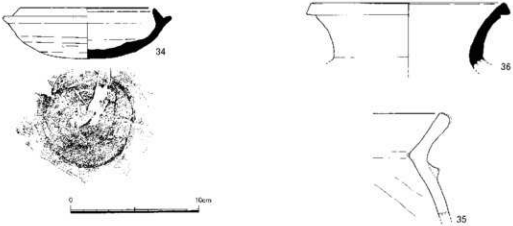


Fig. 19　ＳＣ１８出土遺物実測図（1/3）

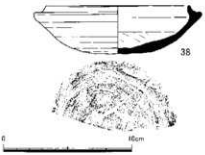


Fig. 20　ＳＣ１９出土遺物実測図（1/3）

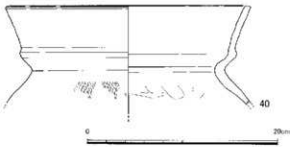


Fig. 21　ＳＣ２０出土遺物実測図（1/3）

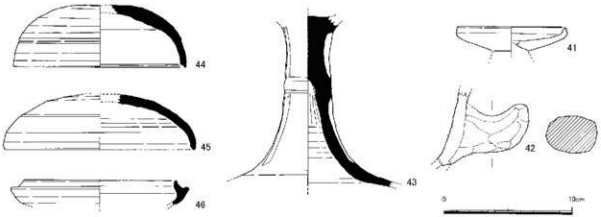


Fig. 22　ＳＤ２２出土遺物実測図（1/3）

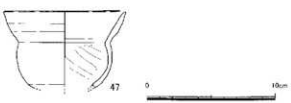


Fig. 23　ＳＤ２３出土遺物実測図（1/3）

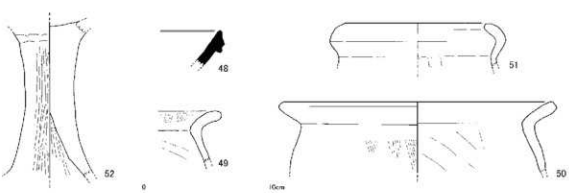


Fig. 24　ＳＥ２４出土遺物実測図（1/3）

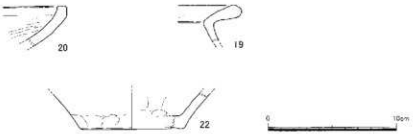


Fig. 25　ＳＫ０６出土遺物実測図（1/3）

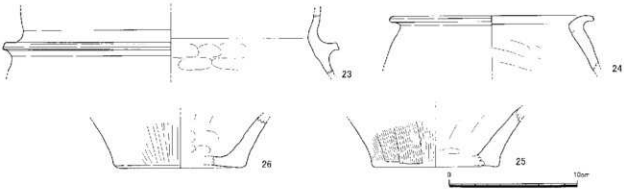


Fig. 26　ＳＫ０８出土遺物実測図（1/3）

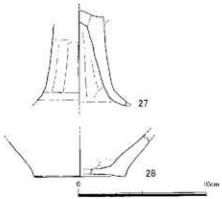


Fig. 27　ＳＫ１０出土遺物実測図（1/3）

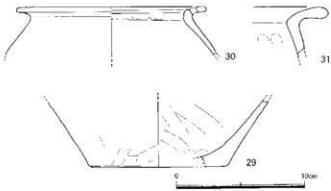


Fig. 28　ＳＫ１１出土遺物実測図（1/3）

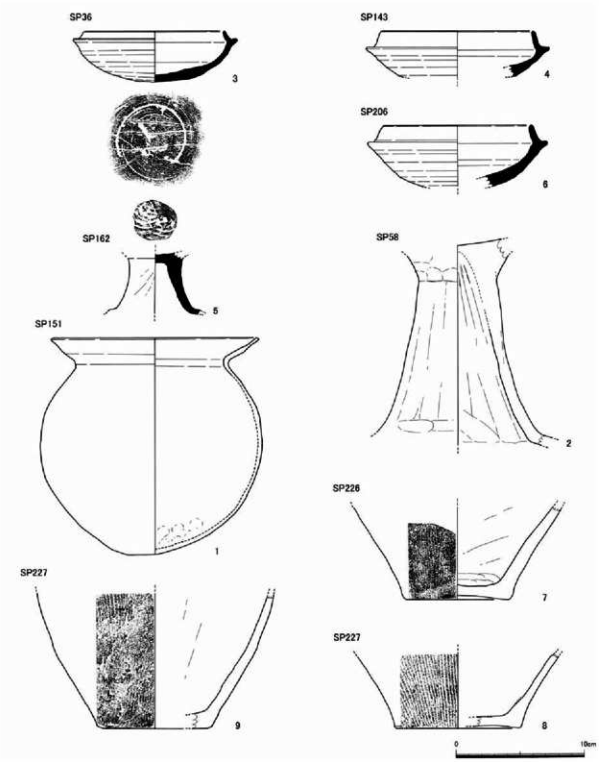


Fig. 29　ＳＰ出土遺物実測図（1/3）

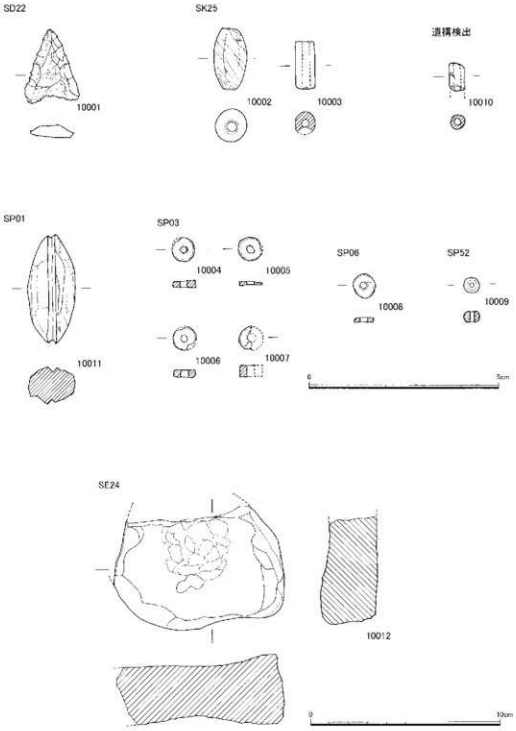


Fig. 30　出土石製品実測図 (1/1・1/2)

第Ⅳ章　まとめ

【集落の開始時期】

今回の調査では、これまで那珂遺跡における丘陵背上の様相が不明であったが、周辺地域においては大規模な削平が認められるものの、鳥栖ロームに代表される洪積層面が良好な状態で残存していることを確認するとともに、弥生時代中期と古墳時代後期の集落の存在を明らかにする成果を得た。同地域における集落活動は、出土遺物等から弥生時代前期には萌芽期が認められ、遅くとも弥生時代中期には成立し、以降も継続して営まれている。

【集落の盛衰】

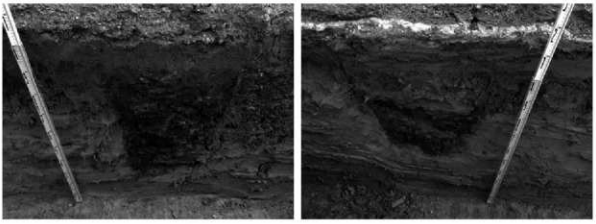
丘陵における集落は、長きに渡って営まれている間、いくつかのピークが存在していたことを出土遺物や遺構などから明らかとなった。特に隆盛したと考えられるのが弥生時代中期～後期前半、古墳時代初頭、古墳時代後期の 6 世紀代中頃～ 7 世紀初頭である。

【集落の構成】

本調査地から続く丘陵背上、南 100 m に位置する第 67 次調査地は、弥生時代前期～中期の環濠集落や貯蔵穴群・甕棺墓や土壙墓などの墳墓群、古墳時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの多くの遺構が検出されている。遺構の時代性、特に隆盛期については本次調査と重複しており、特に、弥生時代中期における遺構の有り方は、地域において土地を用途別に区分した利用が行われていた可能性を示すものと考えられる。

【関連資料】

本調査中の 2 月 16 日、調査地の西方 20 m の市道で下水道改良工事が行われ、地表下 1.2 m まで掘削した下水道管埋設坑の壁面において、下段写真に示すように径 0.4 m 、深さ 0.7 m を測る大型の柱穴や土壙を確認した。さらに、黒褐色粘質土の覆土には弥生時代中期後半の甕片が包含されていた。これらのことから、調査地が位置する低丘陵背上には、弥生時代中期を中心として広範囲に遺構が展開し、残存しているものと考えられる。



遺構検出状況（那珂 1 丁目地内下水道工事）

【おわりに】

今回の調査では、那珂遺跡の所在する丘陵における変遷過程を理解する上で重要な資料を得ることができた。調査成果は、本調査地近辺における既調査地の調査成果と整合し、今後の那珂丘陵の歴史的変遷の解明に向けた一歩と言える。

図　　版
PLATES

（竪穴住居跡調査風景）

調査地周辺航空写真（1939年撮影）

【国土地理院所蔵】

調査地周辺航空写真（1948年撮影）

【国土地理院所蔵】

調査地周辺航空写真（1987年撮影）　【国土地理院所蔵】

調査地周辺航空写真（2007年撮影）

【国土地理院所蔵】

（1）第 1 調査区全景（北西から）

(1) 第2調査区全景（北西から）

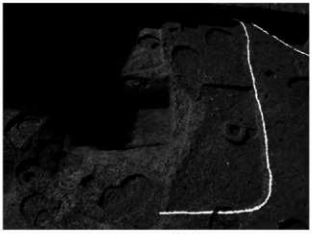
(2) 第2調査区全景（北東から）

（1）SC01（北東から）と炉跡　【第 1 調査区】

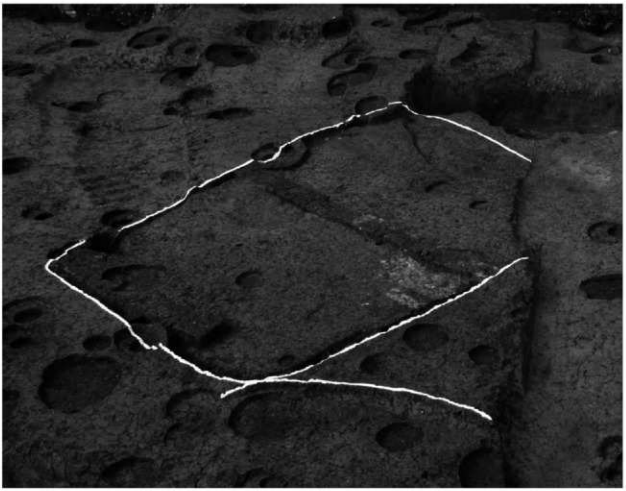
（2）SC02 北半部（北から）　【第 1 調査区】

（3）SC02 東辺部（北から）　【第 1 調査区】

（4）SC03（北から）　【第 1 調査区】



（5）SC04（東から）　【第 1 調査区】



(1) SC05 (北から) 【第1調査区】

(2) SC12 (東から) 【第1調査区】

（1）SC18～20（東から）　【第 2 調査区】

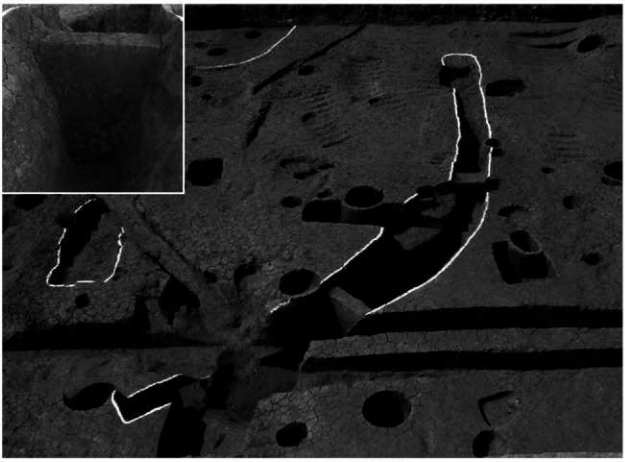
（2）SC18（北から）　【第 2 調査区】

（3）SC18 遺物出土状況（西から）　【第 2 調査区】

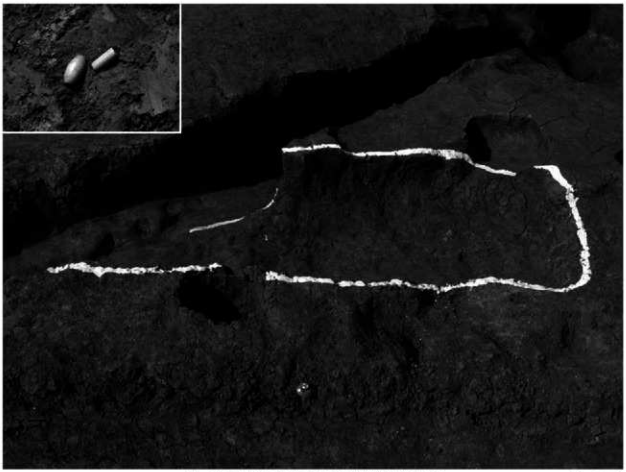
（4）SC19（北西から）　【第 2 調査区】

（5）SC20（北西から）　【第 2 調査区】

（1）SB100（北から）　【第1調査区】

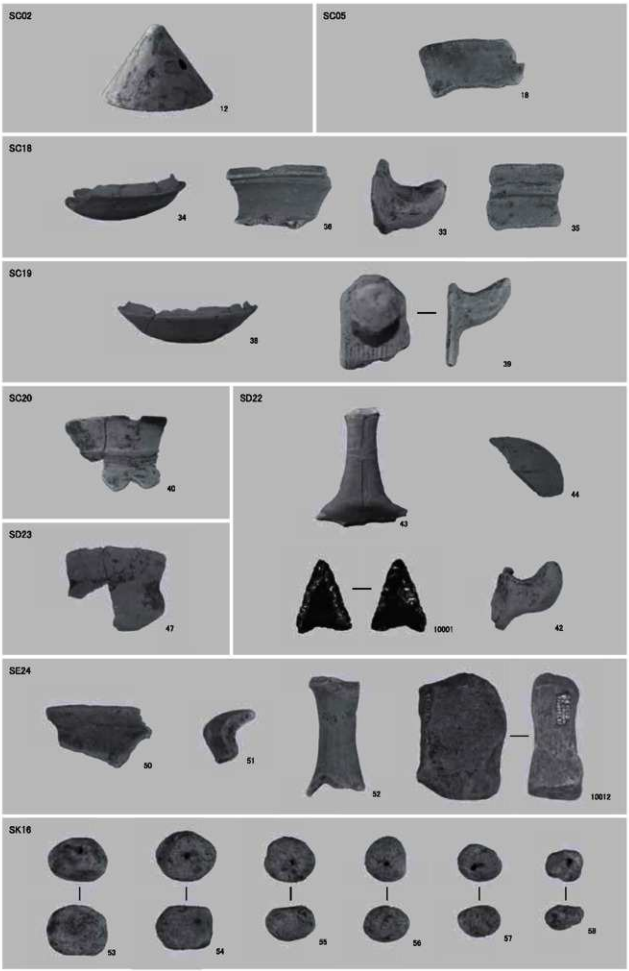


（2）SD22（北東から）と土層（南東から）　【第2調査区】



（1）SK25（南東から）と副葬品出土状況（北東から）　【第 1 調査区】

（2）SE24（南東から）　【第 2 調査区】


SC02
12
SC05
18
SC18
34
36
33
35
SC19
38
39
SC20
40
SD22
43
44
SD23
47
10001
42
SE24
50
51
52
10012
SK16
53
54
55
56
57
58

出土遺物（1）

SK25
10002
10003
SP01
11
10011
SP03
10004
10005
10006
10007
SP06
10008
SP52
10009
SP36
3
SP58
2
SP143
4
S162
5
SP151
1
S206
6
SP226
7
SP227
9
遺溝検出
10010

出土遺物（2）

報告書抄録

ふりがな	なか 71
書名	那珂 71
副書名	第 142 次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 1260 集
編著者名	瀧本正志
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8620　福岡市中央区天神 1-8-1
発行年月日	2015 年 3 月 25 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
なかいせき 那珂遺跡	ふくおかけん ふくおかし 福岡県 福岡市 はかたく なか 博多区 那珂一丁目 92 番	40132	0085	33°34′26″	130°26′08″	20130123 ～ 20130315	408.7	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
那珂遺跡	集落跡	弥生時代中期・古墳時代・古代	竪穴住居・土壙墓・土坑・溝・掘立柱建物	弥生土器、土師器、須恵器、石製玉	弥生時代～古墳時代の集落を検出

要約

那珂遺跡は、福岡平野中央を北流する御笠川と那珂川に挟まれた洪積台地に立地する。調査地は、遺跡の北西部、北へ延びる春日丘陵の尾根上および東側の斜面に位置し、標高 8.2 m を測る宅地である。

検出した遺構は弥生時代中期の円形竪穴住居 1 棟、古墳時代後期の方形竪穴住居 8 棟、土壙墓 1 基、井戸 1 基、土壙、溝状遺構、柱穴・小穴多数などである。弥生時代の竪穴住居は経 6 m を測り、中央部に炉を設けている。他の住居規模は削平が激しく、不明。柱穴および小穴の多数は、古墳時代～古代に比定される竪穴住居や掘立柱建物を構成していたものと考えられる。土壙墓は隅丸長方形の平面形を呈する。

遺物は弥生土器、土師器、須恵器、石製玉類などがコンテナで 10 箱が出土している。

今回の調査では、これまで那珂遺跡における丘陵背上の様相が不明であったが、周辺地域においては大規模な削平が認められるものの、島栖ロームに代表される洪積層面が良好な状態で残存していることを確認するとともに、弥生時代中期と古墳時代後期の集落の存在を明らかにする成果を得た。同地域においては、弥生時代中期から活発な集落活動が始まり、古墳時代後期からは断続的に生活が営まれていたと言える。那珂遺跡の所在する丘陵における変遷過程を理解する上で重要な資料を得ることとなった。

那珂 71

—第 142 次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1260 集

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1
Tel 092(711)4667

発行日　平成 27 年 3 月 25 日

印　刷　陽文社印刷株式会社
福岡市南区大橋 2－4－10

NAKA SITE

THE REPORT OF THE 142th EXACAVATIONS
OF THE REMAINS OF NAKA SITE
IN FUKUOKA, JAPAN

調査番号 １２３２
調査略号 NAK-142

March 2015
FUKUOKA CITY BOARD OF EDUCATION
JAPAN